アイヌ英雄叙事詩「ニタイパカイェ」の２種類のテキストに関する考察

A Study about the Two Texts of Ainu Heroic Epic *"Nitaypakaye"*

遠藤志保
ENDO Shiho

要旨　アイヌ英雄叙事詩「ニタイパカイェ Nitaypakaye」には２つのバージョンのテキストが存在する。この２つのテキストを比較し、両者ではどのような点で一致し、どのような点で違いがみられるかについて考察する。具体的には、それぞれのテキストにおけるプロットの構成、登場人物の行為や描写の語り方、行為を語る際の順序の入れ替えなどについてそれぞれ論じる。

基本的な話の構成や登場人物の役割や行為といったストーリーに関わる要素においては両テキストの間に差異はほとんど見られない。一方で、ストーリーの終盤の構成や語り方、主人公の出自をめぐっての語り方、行為の理由や物語る順序に関しては、さまざまな差異が見られる。したがって、両テキストにおいては同じように語られている要素は、終盤を除いたストーリーに直接関係してくる部分であり、違いがみられる点は、そこに影響を及ぼさない要素であると言える。

１．目　的

門別町郷土史研究会（1969）に収められている、鍋沢元蔵氏の筆録による「ニタイパカイェ Nitaypakaye」という英雄叙事詩がある。主人公が立派な山城で養い姉や養い兄に育てられていると語り始めるのが、アイヌ英雄叙事詩においては典型的なパターンだが、この「ニタイパカイェ」では兄姉ではなく爺に育てられているという点で、少し変わった始まり方をする物語である。

これと同じ物語が、やはり鍋沢元蔵氏の筆録によって書き遺されていることがわかった。国立民族学博物館所蔵資料の「1928年から1959年にかけて書かれた、アイヌ語による５冊のノート」（http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/iurp/07jr101）のなかにある、昭和29年に筆録された「ニタイパカイェ」のテキストがそれである。門別町郷土史研究会（1969）に収められているテキストは昭和40年筆録であるので、同じ物語の別バージョンのテキストということになる。

鍋沢氏の筆録テキストには口承におけるテキストと同じような特徴がみられる（遠藤、2010）。口承文学におけるテキストの同一性は、書承のそれとは異なり、一言一句変わらずに再現されるわけではない。そしてやはり、鍋沢氏による２種類の「ニタイパカイェ」においても、少なからぬ相違点がみられる。

そこで本稿では、アイヌ英雄叙事詩「ニタイパカイェ Nitaypakaye」の２種類のテキストを比較対照し、両者ではどのような点で一致し、どのような点で違いがみられるかについて考察する。物語の構成、登場人物の行為や描写、語られる順序の入れ替えなどのプロットに関わる点について扱い、両テキストで相違がみられる部分を中心に論じていく。

2．使用テキスト

本稿では、鍋沢元蔵氏筆録による「ニタイパカイェ Nitaypakaye」というタイトルの英雄叙事詩をテキストとして用いる。

鍋沢元蔵（アイヌ名・モトアンレク）氏（1868－1967）は、沙流郡平取町紫雲古津の生まれで、門別町（現・日高町）富川に住んでいた。英雄叙事詩をはじめ、神謡・祈詞などの多くのテキストを筆録によって残している。

「ニタイパカイェ」のテキストのひとつめは、門別町郷土史研究会（1969）に収められている昭和40年筆録のテキストである（以下、「S40年版」と記す）。もうひとつは国立民族学博物館所蔵資料における鍋沢元蔵氏筆録のノートに遺されていたテキスト（以下、「S29年版」）である[1)]。したがって、同一のテキストを同一人物が、時をおいて筆録したということになる。

門別町郷土史研究会（1969）によると、鍋沢氏は大正10年に口承文学の筆録を始めて以来、多くのテキストを記していたようだが、昭和37年 3 月に起きた自宅の火災によってそれ以前に書かれたノートは焼失してしまったという。S29年版は他者の手に渡っていたかしたために、運良く火災を免れたようだ。だが、鍋沢氏自身はこの火事によってS29年版テキストを失ったと思いこんでいたために、改めて書き直したのというのが、11年の時をおいて新たに同じ物語が筆録された理由としては、可能性が高いのではないだろうか。

そのため、「同じ伝承者によって同じ物語が複数回にわたって語られたり、改良が行われたりする場合」には「物語を『よりていねいに』『より良く』遺したいという伝承者の希望に基づいて」（坂田、2011：P81）いる可能性もあるが、鍋沢氏の「ニタイパカイェ」においては、S40年版はS29年版を「改良」したという関係性にあるのではなく、互いに直接の影響関係はないテキストであると位置づけておきたい。

3．先行研究

アイヌの英雄叙事詩には「ニタイパカイェ」の他にも同一の伝承者による同一タイトルの物語を口述／筆録したテキストがある。公刊されているものとしては中川（2001b）所収の白沢ナベ氏口述による「トゥムンチペンチャイ、オコッコペンチャイ」というテキストがあり、その他には金成マツによる「朱の輪姫 kemka karip」「ウナラペトゥレシ」についても 2 つのバージョンのテキストが存在するという。

中川（2001b）では「トゥムンチペンチャイ～」の 2 つのバージョンについて、ストーリーと語数についての簡単な比較と解説が付されている。そこでは「テキストの細かい表現的なものばかりでなく、ストーリーそのものも全く同じ展開を見せるわけではない。というより、エンディングに近づくにつれだいぶ違った展開になってくると言った方がよい」ことや「テキスト 2 は 1 に比べ、後半の比重が高くなっている」ことが指摘されている（P92）。

「朱の輪姫」については、「同じ伝承者が同じ題のユーカラを十余年隔てて書いた」テキストを「比較して見ると、発端はほゞ同じであるが、あとは自由に書き流されて、事がら

1）　S29年版はアイヌ語（カナ表記）のみのテキストであるため、本稿にあげた和訳はすべて筆者による。またS40年版の引用にあたっては原著の対訳に準拠したが、S29年版と比較する便宜上、和訳を変えた箇所もある。

は大体同じであるが、文章は一々同じにならず、ゆっくり伸び伸びと書かれていて、ちっとも字句にこだわらない。だから、すっかり意味のわかる人にとっては同じユーカラとすぐわかるけれど、少しも意味がわからず字形だけを見る人には全く別な記録のように思われるであろう程ちがうのである」（金成・金田一、1964：解題P4）ものであると述べられている。さらに、このことについて「一代前の古老たちの伝承では、こうはちがわなかったようで、あの頃は個人的要素の加わるものは、『あれはちがう』と排斥されるものだった」が、金成マツは「作品を仕上げるような楽しみをもって」書いている（同）と述べているように、金田一は 2 つのテキストにおける違いを「個人的要素」を加えたために生じたと考えていたようである。

以上のように、別バージョンのテキストにおける違いとしては、表現、語数（行数）ならびに終盤のストーリーが指摘されている。しかし、どちらもテキストを詳細に比較した分析ではなく、物語全体の傾向を挙げるにとどまっている。

また蓮池（1997）では、 2 種類の「ウナラペトゥレシ」を取り上げ、1929年筆録テキスト（A）と1943年筆録テキスト（B）の間にみられる「一四年を隔てての四千行の差」（P275）の理由を論じている。そして「語彙数が大きく異なる」 5 つの場面を取り上げ、Bはいずれも「関係者が延々と自分の心情を吐露している」ことによる「具体的で、細やかな叙情的表現」となっているという。それが行数の差につながり、さらには「Aの表現は叙事的であり、Bは叙情的」になっているとして、「叙事から叙情的表現へ。伝承という古典的スタイルに仮託して、自分の心情を記述していったマツは、すでに〈表現者〉である」（P278）という結論に至っている。

しかしながら、坂田（2011）で「口頭伝承において伝承者が主張する『同一性』」について、「複製文化時代における同一性と同じもの」（P77）ではないと述べているように、「文章は一々同じにならず」というのは口承文学において普遍的に見られる特徴である。そのため、同書では金成マツの 2 テキストにおける違いが「伝承の逸脱か、結局のところ伝承のあり方を提示しているものか、直ちに判断することはできない」（同）と述べており、金田一や蓮池のように金成マツのテキストを文学的な「個人的要素」が付け加わったものだと即断することに疑問を呈している。

4．プロット

4.1. 物語全体の構成

以下、 2 種の「ニタイパカイェ」を対照するにあたって、まずは大まかなプロットの流れから見ていきたい。

「ニタイパカイェ」は、主人公が育ての爺（ニタイパカイェ）に育てられているところから始まる。主人公がニタイパカイェの仲間たちが行っている戦いの加勢に向かうと、戦いの場では敵が「我々はお前の兄・おじだ」と名乗る。しかし主人公は話を聞かずに攻撃する。すると突然、何者かによって主人公は天の国に連れ去られてしまう。連れ去ったのはアエオイナカムイだったが、主人公がアエオイナカムイの妹に刃を向けてしまったため、今度は地下の国に連れて行かれる。主人公はそこで、兄たちやアエオイナカムイの妹に攻撃したことを後悔する。真の敵はニタイパカイェだと気づいた主人公は、再び戦いの場に赴くとニタイパカイェとその仲間たちを殺し、生まれ故郷のシヌタプカに戻って平穏

に暮らす。

しかしアエオイナカムイの妹のことが気にかかり、天の国に向かう。彼女の家に忍び込んだが見つかってしまい、彼女の婚約者となっていた雷の神の弟との戦いとなる。それに勝利すると、主人公はシヌタプカに戻って平穏に暮らす。

以上が 2 つのテキストに共通するあらすじである。さらに相違点も含めて 2 つのテキストについてそれぞれまとめると、表 1 のようになる。各場面の名称は筆者が便宜的につけたものである。また、表における「↓」は、主人公の移動を表し、（　）内の数字は各場面で費やされている行数を示す。

表 1　「ニタイパカイェ」の話の構成と場面ごとの行数

S29年版	S40年版
平穏に暮らしている（121行）	平穏に暮らしている（133行）
↓　戦いの音のするところへ（31行）	↓　戦いの音のするところへ（32行）
戦い①：兄たち・おじとの戦い（266行）	戦い①：兄たち・おじとの戦い（361行）
↓　天の国へ連行される（75行）	↓　天の国へ連行される（44行）
アエオイナカムイの妹を攻撃（145行）	アエオイナカムイの妹を攻撃（138行）
↓　地下の国へ連行される（21行）	↓　地下の国へ連行される（15行）
地下の国で反省させられる（236行）	地下の国で反省させられる（202行）
↓　人間の国に戻る（36行）	↓　人間の国に戻る（18行）
戦い②：ニタイパカイェとの戦い（206行）	戦い②：ニタイパカイェとの戦い（234行）
↓　シヌタプカへ（11行）	↓　シヌタプカへ（15行）
兄たちと平穏な暮らし（63行）	兄たちと平穏な暮らし（122行）
↓　眠れずに山城を飛び出す（91行）	↓　眠れずに山城を飛び出す（73行）
天の国のアエオイナカムイの家へ（141行）	天の国のアエオイナカムイの家へ（73行）
↓　天の国の西端へ（ 4 行）	↓　天の国の西端へ（ 3 行）
戦い③：雷の神の弟との戦い（282行）	戦い③：雷の神の弟との戦い（265行）
戦い④：フリとの戦い（69行）	——
↓　人間の国のシヌタプカへ（10行）	↓　人間の国のシヌタプカへ（ 9 行）
山城での平穏な暮らし（239行）	山城での平穏な暮らし（23行）

プロットは大きく変わることがない。唯一の大きな違いは、S29年版のみにフリ（huri）という怪鳥との戦い（表 1 ：戦い④）が挿入されている点である。また、結末にあたる「山城での平穏な暮らし」では行数の差が200行以上あり、先行研究（中川、2001b）での指摘と同様に、「ニタイパカイェ」においても、「エンディング」に近くなると展開が異なる傾向にあることがわかる。

総行数は、S29年版が2,047行、S40年版が1,760行となっておりS29年版のほうが300行ほど多い。行数の差が比較的大きい場面は、「兄たちとの平穏な暮らし」と「天の国のアエオイナカムイの家へ」「山城での平穏な暮らし」で、それぞれ倍近い行数の差がある。

「兄たちとの平穏な暮らし」は、S40年版で語られている「サンプトゥンクルの復活」「メッカ打ち」といったモチーフが、S29年版では結末（「山城での平穏な暮らし」）で語られているという違いが行数の差につながっている。また、「天の国のアエオイナカムイの家へ」の場面では、細かい描写の違いもあるものの、S29年版のみで「フリ」の存在が

示唆されていることが行数の差につながっている最も大きな要因となっている。

場面構成上は終盤の２場面の違いのみで、２つのテキスト全体における行数の差も「戦い④：フリとの戦い」（69行差）「山城での平穏な暮らし」（216行差）という終盤の場面によるところが大きい。しかし、単に「戦い④：フリとの戦い」が挿入されただけということではなく、前半部のエンディングにあたる「兄たちとの平穏な暮らし」から徐々に展開の乖離が始まっていると言える。

このS29年版でのみ現れるフリとは、「アイヌの伝承中に出てくる巨大な鳥」で「多くの伝承では人間をさらっていくといった悪い化け物として登場する」（小松他、2013：p493）ことが多い。だが、このテキストにおけるフリは、雷の神の憑き神（kanna kamuy ／ turen rok kamuy）であるという、やや特異な語られ方をする。そして、雷の神が殺された後に現れて、主人公はこれを倒す。

フリは主に散文説話や神謡、あるいは体験談に登場することが多いが、金成他（2009）所収の英雄叙事詩に「フリとの戦い」という段があるなど、英雄叙事詩にも登場する例は見られる。また、「憑き神」は通常、英雄叙事詩の戦闘場面で「憑き神同士の戦い」を行うことが多く、主人公と直接対峙する存在として現れることは比較的珍しい。しかし萱野（1998）に「ヤイトゥレンペ　コイキ　自分の憑き神と戦う」という英雄叙事詩が収録されているように、皆無ではない。しかし、その２つの要素が組み合わさって、雷の神の憑き神がフリであるというモチーフとなると、管見では見当たらないようである。

なぜ、このような戦いが見られるのか。それを考えるにあたっては、北海道アイヌ民族文化研究センターHP上「ほっかいどう　アイヌ語アーカイブ」から聞くことのできる「平賀さだ氏[2)]によるユカラ（天界の端で龍と戦った少年の物語）」という音声資料が参考になるだろう。タイトルは異なっているが、これも「ニタイパカイェ」の物語である。

この平賀氏のバージョンでは、天の神（kantori kamuy）の弟との戦いの後は、天の神の兄との戦いが始まるという展開になっており、鍋沢氏のいずれのテキストとも異なっている。

だが、３つのテキストのうち２つで雷の神（天の神）の弟の関係者との戦いが語られていることから、雷の神の弟との戦いの後に、彼の関係者が次の主人公の相手になって戦うというS29年版のような展開が、鍋沢氏がもともと伝え聞いていた物語に近い形だと考えられるのではないだろうか。そして、S40年版では紙幅や時間等の制約によって、この戦いが省略されたと考えられる。

このように、ある敵対者が主人公に倒される前に「自分より強い相手が次はお前（＝主人公）の相手になる」と宣言し、その通りにより強力な敵対者が主人公の前に現れるという展開は、アイヌ英雄叙事詩においては多く見られるパターンである。たとえば鍋沢氏の「フリハヨㇰペ」という英雄叙事詩（門別町郷土史研究会（1969））では、敵対者が主人公に向かって、自分を倒しても自分の村を守護（epunkine）している神が戦いに助太刀するだろうから、お前は生きていられないだろうと宣言する。その予告通りに、敵対者が主人公に殺された後、「ニシポㇰ村を守護する神」が主人公と一戦交えることとなる。

---

2)　平賀さだ氏（1895ごろ－1972）は沙流郡門別町（現・日高町）の福満（Piraka）で生まれ育つ。女性だが、「幼いときはいつも養父のひざの上でユーカラなどを聞いていた。そのため、ふつうは男性しか歌わないユーカラ（英雄叙事詩）を男性のような節をつけて歌うことを身につけていた」（田村、1996：「アイヌ語沙流方言略説」P23）。

平賀氏のバージョンでは、敵対者が雷の神の兄となっているが、アイヌ英雄叙事詩で兄弟の勇士が出てくる場合、弟より弱いことが多い。たとえば、前述の「フリハヨㇰペ」ではニシポクンクル兄弟と戦った際、兄との戦いでは「勇士の一騎討ち／立っての一騎討ち／われら互に勇を／比べ合いしてして／兄の勇士を／殺したのである」（P208-209）と簡単に殺してしまっているような語り方だが、弟との戦いでは相討ちとなり主人公は瀕死の重傷を負う。

そのためS29年版では、弟より弱く思われがちな雷の神の兄ではなく、明らかに強いものとしてフリという巨大な化け物鳥が登場するのではないか。そしてその際に、雷の神とフリとを関係づけるための理由が「憑き神である」ということなのではないだろうか。

4.2. 主人公の出自の謎をめぐる語り口の違い

以下、両テキストで差異が見られる特徴について論じる。

アイヌ英雄叙事詩においては、養い姉（あるいは養い兄）によって大切に育てられていたというのが典型的な語りだしのパターンである。しかし、「ニタイパカイェ」においては「育ての爺（ニタイパカイェ）」によって育てられていると始まり、典型的な状況ではない。以降、特に前半部においては、なぜ主人公は兄や姉とではなく、ニタイパカイェによって育てられていたのかという謎を中心とした、主人公の出自をめぐる物語が展開する。そして、この謎に関する叙述の仕方には、両テキストで違いがみられる。

S40年版は、「わが爺や」に「岩の洞穴の懐」で大事に育てられているという叙述から始まる。典型的な英雄叙事詩の語りだしが「シヌタㇷ゚カのトミサンペッで養い姉に大切に育てられていた」とあるように、「どこで誰にどのように育てられている」を語っているという点では英雄叙事詩の典型的な語りだしを踏襲した叙述だと言える。また、遠くからドンドンという音（otonrim）が聞こえる、と周囲の様子を叙述した後、あれは「シヌタプカの奴等」が「わが部下と戦争している」音であると、ニタイパカイェによって早々に戦っている相手の正体が明かされている。

初出の時点で主人公の目に触れた事物・状況がそのまま叙述され、それが何なのかが明らかにされているが、このような語り方は多く見られ、典型的な語り方だと言ってもよい。たとえば、主人公の家に突然やって来た男が家に入ってくるのを「見てみれば／使いの下男／のよう」な顔つきだという。その直後には、本人が自分は余市彦（イヨチウンクル）の使いの者であることを明らかにしている（門別町郷土史研究会（1969）：P263）。新たな人物が登場した時点で、どのような姿をしているのか、あるいはどこから何しにやってきた何者であるのかが真っ先に語られる。このようなアイヌ英雄叙事詩における典型的な叙述のあり方が、S40年版においても同様に見られる。

一方、S29年版では、主人公が「洞穴」で育てられていたことが明らかにされるのは、戦いに赴くために外に出るという場面にいたってからである。ここでようやく「意外にも洞穴の中で私は育てられていたのだとわかった」と語られる。行数で言うとS40年版より約120行遅れての叙述となっている。また、ドンドンという音がニタイパカイェの仲間たちが戦っている音であることはニタイパカイェ自身によって明らかにされているが、その相手が誰であるのかは、主人公が実際に戦いの場で彼らに相対するまでは明らかにされない。それ以前では、ただニタイパカイェの仲間と「戦っているもの」という間接的な言い

回しで語られるのみで、その相手の正体については伏せられたままである。

したがって、S29年版では主人公の出自に関係のありそうな情報は簡単には明かされない。直接的な表現は回避されていることから、ストーリーにおける謎を活かして、そのヒントや解明の先延ばしに力点を置くような語りを展開しているように読める。

以上のような傾向は、さらに続く。主人公が戦いの場に赴き、「戦っているもの」たちを見た際にも、S40年版では初見で「チウセレスと思う（奴）」「カムイオトプシと思う（奴）」「サンプトゥンクルと見受けた者」であるように思うと述べている。このように、初見の相手や場所を「（わからないが／初めて見たが）～と思われる奴／村」のように推測の形をとりながらも確定するという言い回しは、英雄叙事詩ではしばしば用いられる語り方である。

これと同じ場面をS29年版では、長兄・チウセレスを「若者（pon aynu pon kur）」、次兄・カムイオトプシは「その（チウセレスの）そばで戦っているやつ」、おじ・サンプトゥンクルは「その（カムイオトプシの）そばで鼓舞している者」であると語り、具体的な固有名詞は一切出さない。S29年版で彼らの名前が明かされるのは、サンプトゥンクルによる自分たちの名乗りの場面においてである。行数で言うと、S40年版では88～90行目で明かされる名前が、S29年版では272～275行目でようやく登場している。

しかしS29年版でも、固有名詞が明かされる前に「髪が美しい」というカムイオトプシに特有の描写や、カムイオトプシらが主人公と同じような装束を身につけているという描写は挟まれている。カムイオトプシは主人公の実兄として他の英雄叙事詩でもしばしば登場する人物であるため、彼に固有の「髪が美しい」という特徴や主人公との関係性が示唆される装束といった情報から、敵対者は主人公の実兄（カムイオトプシ）のようだという推測はできる。そのため、「カムイオトプシ」という名称をできる限り遅い段階で出すことによって、読み手／聞き手に「主人公と相対している人物は、カムイオトプシのようだが本当にそうなのか」という疑問を抱かせるかのような語りになっているとも言える。

S29年版においても、主人公を天の国に拉致した人物をはじめて目視した際に「見たことがない奴だけれどもアエオイナカムイに違いない」という初見の人物の名称をあげる言い回しは使われていることから、すべての人物の正体を先延ばしする傾向にあるわけではない。あくまでもS29年版では、「主人公の出自」に限っては情報を小出しにして、謎の解明を引き延ばそうとする傾向にあると言えるだろう。

主人公の出自や敵対者（兄たち）の正体をめぐる語り方を比べると、S29年版ではストーリーに含まれる謎を最大限に活かすような語り口を採用しているのに対し、S40年版ではより英雄叙事詩に特有の語り口が優先されるようになったと言うことができそうである。

4.3. 行為にいたる理由

２つの「ニタイパカイェ」のプロットは、終盤におけるいくつかの違いを除くと、ほぼ同じだということは先に確認したとおりである。プロットが同じということは「誰が何をした」という行為・行動が共通しているということでもある。しかし、ある行為をすることになった理由については、共通しているのだろうか。ここでは、そのような行為の理由をどう語っているのかということに焦点を当てる。

まず取り上げるのは、主人公が兄たちと初めて顔を合わせる戦闘場面（表１：戦い①）

である。ここで兄たちは「お前は私たちの弟ではないのか」と主人公に問いかける。しかし、主人公はそれには答えずに兄たちに向かって刀を向けて攻撃を始める。

主人公がこのような行動にいたる理由を、S29年版では「爺さんが私に言いつけていたことがあったために」と語るが、S40年版では「怒りの心が起きた」ためだと語る。まったく違う心情によるものとなっているが、これは「問いかけを無視して攻撃した」という一連の流れのうち、S29年版は「問いかけを無視する」理由に、S40年版は「攻撃する」理由に焦点を当てているために生じた違いだと考えられる。

さらに、S29年版ではニタイパカイェが主人公を送り出す際に「万が一にも／私がお前を育てたことを／言っては／いけないよ。／お前の戦う相手が／尋ねても／言っては／いけないよ」（76－83行）と申し添えており、そうした文脈も反映して「言いつけられたことがあったために」無視したという結果になっているのであろう。

またS40年版のような「怒りの気持ちを抱いた（kinra maw ne / i=kohopuni）」は、頭に血が上った主人公が戦いを始める際に常套的に用いられる表現のひとつである。そのため、4.2.で確認したように、S40年版では英雄叙事詩に特有の語り口を用いるという傾向が、ここでも見られることは注目してもよいだろう。

もうひとつ重要な点は、両テキストにおいて、行為そのものは「刀を振るう」と共通していても、その行為の理由は異なる場合もあることである。そして、それはどちらかのテキストが間違っているというわけではない。

たとえば、主人公が地下の国に連れて行かれることになったとき、その理由は「お前の兄が言った言葉を踏みにじり、アエオイナカムイが言った言葉も踏みにじった」ため（S29年版）、あるいは「魔神の心を持っているために敵に味方した」（S40年版）ためであると、それぞれ語られている。ここだけ取り上げると、まったく違う理由で怒られているようでもある。だが、どちらもニタイパカイェに味方し続けて、主人公と話し合おうとした実兄たちに攻撃を仕掛けたという、それまでの主人公の行動全体を問題視している点では変わりがない。主人公の行動のうち、どこに焦点を当てるかによって、「言葉を踏みにじった」「敵に味方した」という言葉の上での相違が生じているのであろう。

他にも「後悔」した主人公に対して地下の国のトゥムンチエカシが自分の鎧を主人公に貸し与える場面がある。S40年版では「お前が裸で戻っても兄を助けることはできないから」と鎧を貸し与える理由をトゥムンチエカシは説明している。しかし、S29年版ではこのような発話は見られない[3)]。このような発話がなくとも前後の文脈から、鎧が渡される理由の推測ができるために省略されたものと考えられる。

なぜそのような行為にいたるのかという理由が説明されることも多いが、必ずしもすべてのテキストで同じ理由が語られるとは限らない。その違いは、当該行為のどこに焦点を当てるかによって異なってくる。さらに理由の説明そのものを一方のテキストでは欠いている場合もみられることから、行為の理由はきわめてオプショナルな要素であり、テキストごとの相違が大きくなる部分だと言えるだろう。

3）　S29年版ノートをはじめとする国立民族博物館所蔵の鍋沢元蔵氏による筆録ノートを見る限り、明らかな間違いや書きそびれた部分に関しては、棒線で消す・脇に書き足すなどの訂正が入っている。そのような訂正が見られないこともあり、単純に書きそびれた可能性も考えられるが、書きそびれたとしても、それが「誤り」だと認識されてはいなかったものと判断した。

4.4. 結末

すべての戦いを終えた後、シヌタㇷ゚カの山城に戻って平穏な暮らしを送った、と語られる部分を「結末」と呼ぶことにする（表１の「山城での平穏な暮らし」に該当）。4.1.で既に述べたように、結末部分に費やされている行数は、S29年版では239行となっているが、S40年版では23行であり、大きく違っている。

S40年版では、戦いを終えた主人公がシヌタㇷ゚カの山城に戻ると、それを見た兄たちが主人公の無事の帰還を喜ぶ。その後は、「わが寝台／寝台の上に／われ身を投げて／臥したこと／われ物語った」（P202）と語られて終わる。したがって、直前までアエオイナカムイの妹をめぐる戦いをしていたのにも関わらず、彼女が主人公のもとに嫁入りしたのか否かすら語られない。婚姻もアイヌ英雄叙事詩における重要なテーマのひとつではあるが、S40年版では婚姻はきわめて軽い扱いとなっているようである。

一方のS29年版では、主人公が山城に戻ってきた後、アエオイナカムイの妹も山城に下りてくる。兄たちはそれを喜び、さらには「長い間、先祖の祭壇を放っておいたので」という理由から酒宴を開くことになる。さらに、酒宴に呼ばれたおじのサンプトゥンクルは、ニタイパカイェに育てられたことによって主人公に植えつけられた悪い心（wen kamuy kewtum）を完全に消すために「メッカ打ち」という魔払いを行う。そして、仲間を呼んでの酒宴がたけなわだ、というところまででこの物語は幕を閉じる。ここでは「婚姻」「魔払い」「酒宴」といったモチーフが語られ、それぞれの描写も数行で終わるようなことなく、丁寧に語られている。

しかしながらS40年版と併せて見ると、さまざまなモチーフを並べながらも結末で述べようとしていることは「平穏な暮らしをしている」に尽きるとも言える。「ニタイパカイェ」という物語における結末の要点はこれであり、そこだけ押さえておけば簡潔に語ることもできれば、丁寧に語ることもできるということではないだろうか。

なお、公刊されている鍋沢氏の英雄叙事詩においては、結末が短い物語が多い。公刊テキストは昭和40年代の筆録が多く、この時代における鍋沢氏の語り口には結末が簡潔になる傾向があると言えそうである。

５．登場人物

次に、主な登場人物の特徴をそれぞれのテキストから簡単に抽出し、その語り方にはどのような異同があるかを見ていく。

以下に、各登場人物の「主な呼称」「容姿・服装」を抜き出して列挙した。また主人公以外については「主な行為」も取り上げて、物語中でどのような機能（役割）を担っているのかも併せて見ていく。

「主な呼称」は、物語中における呼称のうち、「わが弟」などの呼びかけ語を除いたものを挙げている。呼びかけ語は、誰が誰を呼ぶかという関係性が大きく反映される。そのため、ここで考察をしようとしている登場人物そのものの扱い方とは少々外れてしまうことから、割愛した。

「容姿・服装」は、登場人物の容貌が語られている場合、その部分を抜き出した。ただし「怒りの表情」などの感情を表す描写は除いている。

「主な行為」は、主にプロットに関わるような行動を中心に、簡単に抜き出したもので

ある。ただし、プロット上はそれほど重要な行動ではなくても、２つのテキストの間に差異が見られる行動については取り上げた。

なお、２つのテキストのいずれか一方に現れる描写については、それぞれ「S29年版」「S40年版」と末尾に記したが、両テキストに共通する描写には何も記していない。

①　主人公

主 な 呼 称：Poyyaunpe；Sinutapkaunkur（S29年版）

容姿・服装：「小袖の裾を／自分の股に／入れて隠す」ほどの年頃；「立派な鎧（hayokpe kamuy）」をニタイパカイェから授かる（S29年版）；「神の小袖／掛金つきの帯／神下しの太刀／黄金の小笠」の一揃いをニタイパカイェから授かる（S40年版）

②　育ての爺（ニタイパカイェ）

主 な 呼 称：Nitaypakaye；Nitaypakaye / Nitayparama（S29年版）；tumunci ekasi / tumunci sermak（S29年版）；tumunci kamuy（S40年版）

容姿・服装：（記述なし）

主 な 行 為：主人公を可愛がる→主人公に鎧を渡して戦いに向かわせる→（地下の国で改心した主人公と）戦って死ぬ（※復活不可）

③　育ての爺（ニタイパカイェ）の仲間

主 な 呼 称：tumunci kamuy（S29年版）；a=utarihi；wen kamuy（S40年版）

容姿・服装：（記述なし）

主 な 行 為：主人公の兄たちと戦う→主人公＋兄たちと戦って全滅させられる

④　チウセレス＝主人公の長兄

主 な 呼 称：Ciuseresu

容姿・服装：「立派な方」（S40年版）；「勇壮さと／美貌さにおいて／感嘆するほどの者」（S40年版）；「その顔の輝きは／昇る太陽のように／まばゆい光が／さして／勇者の顔つきの／顔つきからして／別格な者」（S29年版）

主 な 行 為：育ての爺の仲間との戦い→主人公に対する名乗り（S40年版）→主人公に斬りかかられるが避ける→主人公と共闘してニタイパカイェの仲間たちを全滅させる→山城の掃除・炊事をする（S40年版）→主人公に対して魔払い（メッカ打ち）（S29年版）

⑤　カムイオトプシ＝主人公の次兄

主 な 呼 称：Kamuy’otopus

容姿・服装：「神様かと／見える／ような／顔のおもて／ぴかぴか光り／輝いており、／髪というものは／うず巻髪で／髪の上に／黄金の水／流れしたたる／それの如く／勇者の容貌／容貌をあらわしていて」（S40年版）；「何と（立派な）／若者／だろうか。／薄手の笠／笠の端の／麗しい髪は／こうなの

だ。／丸餅のような髪／渦巻のような髪で／髪の表面は／照り輝いたり／かげったりして／神々しい顔に／まばゆい光が／さして／ひげの黒味の／まだ足りない者が／勇者の顔つき／その顔つきをして」（S29年版）；「われ装束を着て／われ帯をしめた／ような姿の者」（S40年版）；「私に縁のある者が／私が装束を着る様／私が刀を佩く様を／真似ているようだ」（S29年版）

主 な 行 為：育ての爺の仲間との戦い→主人公への事情説明→主人公に斬りかかられるが避ける→主人公がアエオイナカムイに壊された鎧を拾う→主人公と共闘してニタイパカイェの仲間たちを全滅させる→山城の掃除・炊事をする（S29年版）→主人公に対して魔払い（メッカ打ち）（S29年版）

⑥　サンプトゥンクル＝主人公のおじ

主 な 呼 称：Sanputunkur

容姿・服装：「老年の人が／勇者の容貌／容貌をあらわしていて／別に見える」（＝別格である）（S40年版）；「何と（立派な）／壮年の人／だろうか。／立派なひげが／襟元の上を／覆って／美貌であり／勇猛であり／感嘆するような人」（S29年版）

主 な 行 為：「戦いのそばで魔よけの踊りをしている」→主人公に対する名乗り→主人公に斬り殺される→復活後、主人公に対して魔払い（メッカ打ち）

⑦　アエオイナカムイ

主 な 呼 称：Aynurakkur（S29年版）；Aeoynakamuy；Oynakamuy（S40年版）

容姿・服装：（記述なし）

主 な 行 為：主人公の鎧を壊して天の国に拉致→妹に託すが主人公の無礼さに怒って地下の国へ連れて行く

⑧　アエオイナカムイの妹

主 な 呼 称：pon menoko；Aeoynakamuy kor turesi（S29年版）；Oynakamuy / kamuy turesi（S40年版）；Oynakamuy / kor turesi（S40年版）

容姿・服装：「顔の光は／日の出のように／まばゆい光が／さして」いる；「今年あたりに／遊びの胸紐を／上へあげる／くらいの（年頃）」；「巫力の強い者に違いなく／巫力の現れ／トゥスの現れを／頭飾りをかぶって／隠しながらも／隠形の憑き神は／その頭の上で／またたき／現形の憑き神は／コウモリの群れのように／そのまわりに／群れている」（S29年版）；「神の鉢巻を／首のつけね高く／まきしめて／神の刺繍衣を／上に着て／美しいこと／われ物語る」（S40年版）

主 な 行 為：兄に言われて主人公に煮炊きをしてやろうとする（S40年版）／兄に言われて主人公に「よいこと」を教えて煮炊きをしてやろうとする（S29年版）→主人公が隣で寝ていたので兄に助けを求める→主人公に呪具（金の扇）を授ける→（S29年版のみ）主人公の家にやってくる（嫁入り）

⑨　地下の国の夫婦神（トゥムンチエカシ・トゥムンチフチ）

主 な 呼 称：tumunci ekasi / tumunci huci

容姿・服装：「トゥムンチエカシが／トゥムンチの杖を／杖にして」いる；「（トゥムンチエカシの）背後に／魔の老婆（トゥムンチフチ）が／魔の杖に／古く着いた血が／黒漆のよう／新しく着いた血が／赤漆のよう／金の杖／巻きあげた杖を／手に／持っている」（S40年版）；「（トゥムンチエカシ）の背後には／トゥムンチフチが／海獣の皮と／陸獣の皮とを／組み合わせたもの／で／刀が通るか／わからないものを／肌にぴったりとは／つけずに着て／トゥムンチの杖は／古くついた血が／黒い漆のように／（杖を）這い上がり／新しくついた血が／赤い漆のように／（杖を）這い上がる。／それを手に／持って／互いに／寄り添って」（S29年版）

主 な 行 為：主人公に反省を促す→鎧を貸し与える。

⑩　雷の神（雷の神の弟[4]）

主 な 呼 称：kanna kamuy

容姿・服装：「舟材にする大木の幹の／ようで」；「うろこを高く／立てて」いる；「角の根元は／ねじれ」ている（S29年版）；「体のさきを／くねくねとして」いる（S40年版）；「若い人が／全く単衣だけ／身につけた者／懐刀を／体にさした者」（S40年版）

主 な 行 為：主人公と戦うが殺される。

アエオイナカムイについてはAynurakkur、Oynakamuy、Aeoynakamuyと3種の呼称が見られるが、これらが同一の神であると考えられている[5]ということによる揺れであろう。このほか、主人公はS29年版でのみSinutapkaunkur「シヌタプカの人」と呼ばれているが、この呼び方は他の物語でも一般的に見られる呼称であることから、S40年版ではたまたま登場しなかっただけではないかと推測できる。

興味深いのは、この物語に固有の登場人物たちに限って、両テキストで名称に揺れが見られることである。S29年版では「ニタイパカイェ・ニタイパラマ」という対句を用いた名称（これで1つの名前）が出てきているが、S40年版では「ニタイパカイェ」という名称のみが語られる[6]。また、その仲間たちについても、tumunci kamuy「魔神」（S29年版）、a=utarihi「私（ニタイパカイェ）の仲間」、wen kamuy「悪神、魔物」（S40年版）という名称の違いが見られる。

次の「容貌・服装」にかんしては、主人公の鎧について常套表現を用いて詳しく語るか

4）　正確には「雷の神は2人兄弟であり、その弟のほう」である。だが冗長であるためかkanna kamuy「雷の神」という呼称が用いられることが多い。本稿でも兄弟の区別が必要な場合を除き、彼のことを単に「雷の神」と記している。

5）　中川（1995：P110）によるとOyna kamuyとAynurakkurを同一視しない地域・伝承者もあるが、ここでは久保寺（1992）のoina kamuiの項目に「aeoina kamui / ainu-rak-kur, okikurmi / okikurmui, okikirma. / oina kuru」（P183）と併記してあることを参考にした。

6）　前述の平賀さだ氏口述の「ニタイパカイェ」でも「ニタイパカイェ・ニタイパラマ」という名称は出てくる。また、その仲間についてはan=utari po「私（ニタイパカイェ）の仲間」という名称が出てきた。

否か、地下の国にいるトゥムンチエカシ夫婦の服装に関して「鎧」を語るか否かなど、描写の詳しさが異なる場合が見られる。逆に、姿そのものが大きく異なる人物はおらず、あくまでも描写・表現の違いに集約されると言える。

たとえばアエオイナカムイの妹を、S29年版では「巫力の強さ」「美貌」「年頃」についてそれぞれ常套句を重ねて描写している。対してS40年版は「年頃」「美貌」「装束」について、こちらも常套句を用いて語っている。そして、両者に共通している「年頃」「美貌」に関しては同じ常套句が用いられている。差異としては、S29年版のみで「巫力の強さ」が語られ、S40年版のみで「装束」について語られている点である。どちらの要素も、他のアイヌ英雄叙事詩においてはヒロインが有する特徴としてしばしば語られる要素である。すなわち、英雄叙事詩のヒロインについて語られる要素のうち、どれを語るかという選択にかんしてのみ、２つのテキストでは違いが見られると言える。

唯一、大きく異なるのは雷の神である。S29年版では、最初に現れた時点での様子は語られないが、主人公と刀を振るい合い、追いかけっこのような戦い方をしていることから通常の人間のような姿・大きさであると考えられる。それが「本当の体」は「舟材にする大木の幹の／ようで／角の根元は／ねじれ／うろこを高く／立てて」いるという常套表現を用いて、竜のような姿であると語られる。その体に呪具で降らせた「溶けた金の雨（ru kane apto）」を降らせると「身体の上に（tumam so ka ta）／溶けた金の雨が／入りこんだ途端に／（雷の神の）骨がほぐれて／崩れ落ちた」と語られることから、どうやらこの竜のような姿は雷神の本体のように読める。

一方のS40年版では、S29年版のような刀を用いた追いかけっこ状態の戦いについては語られず、初出の場面で「川舟の体の／ように／体のさきを／くねくねとして／うろこを高く／立てている」という竜のような姿であると語られている。そして、同じくru kane apto（原著の訳では「水銀の雨」だがS29年版の「溶けた金の雨」と同じ）を呪具によって主人公が降らせると、その雨によって雷神の鎧（hayokpe）は溶けてしまう。したがって、この竜のような姿は「鎧」であり、その中からは「若い人（pon aynu pon kur）」が「全く単衣だけ／身につけた」「懐刀を／体にさした」姿で現れる。この「若い人」が雷の神の正体である。

S29年版では、前述のように竜の姿＝本体と考えられているらしく、この最後の「若い人」は出てこない。「ニタイパカイェ」以外の物語を見ると、S40年版のように竜の姿＝鎧、本体＝その中身の若者とするほうが典型的である[7)]。しかしS29年版を素直に読む限りでは、単に「鎧の中の若者」についての描写を落としたのではなく、むしろ雷の神の「本当の姿」に対するイメージがS40年版とは異なっているように捉えられる。

なぜ両テキストにおける雷の神の「本当の姿」が異なるのかという理由については、このテキストからだけでは定かではない。新しい版（S40年版）のほうがより典型的な姿であることから、この11年の間に他のテキストなどから、英雄叙事詩における典型的な「雷の神のイメージ」が鍋沢氏のなかで定着したのだろうかと推測されるくらいである。

最後の「主な行為」にかんしては、両者のテキストではほぼ同じように語られている。したがって、各登場人物はそれぞれの物語における機能・役割が明確に決まっており、そ

7）　たとえば、萱野（1998）：P24-27。

れは入れ替わらないと言える。

ただし、すべての行為において完全に一致しているのではなく、いくつかの差異は見られることから、登場人物の行動がすべて固定されているとは考えられない。

行為者の変更のひとつめは、主人公の兄とおじが主人公に初めて相対した際に、「お前は私たちの身内ではないか」と呼びかける場面である。S40年版ではカムイオトプシが語りかけるが、S29年版ではサンプトゥンクルがその役を負っている。もうひとつ、ニタイパカイェとの戦いを終えて山城に戻った際、S29年版ではカムイオトプシが山城の掃除をし、炊事の支度をするが、S40年版ではチウセレスが同様のことを行っている。

いずれもプロットに直接は関係ない行為である。ただし、「お前は身内ではないか」と主人公に呼びかけるのはカムイオトプシ、サンプトゥンクルの両者に役割が振られているが、「さらわれた弟を捜してまわっているから」戦っているという理由は、両テキストともにカムイオトプシが語っている。そのため、プロットに関係ない行為がすべて、誰とでも自由に入れ替わることができるとは考えにくい。

したがって、それぞれの登場人物が持っているイメージや担っている役割を脱しない範囲においてのみ、プロットに直接関係しない行動の行為者の入れ替えが行われることもあるとまとめることができるだろう。

6．語る順序の違い

前節では行為者の入れ替えが生じる場合について述べたが、行為を語る順序の入れ替えも、両テキストでは見られる。

順序の入れ替えが多く見られるのは、戦闘場面においてである。ニタイパカイェとの戦いの場面において、S29年版では「敵の様子→兄たちの様子」という順番で戦場の様子が描写されているのに対し、S40年版では「兄たちの様子→敵の様子」の順で語られている。

描写のみならず、ストーリーの上でも重要だと思われる行為が両テキストでは異なる位置で語られているという例も見られる。雷の神との戦いにおいて重要な役割を果たす「金の扇（kane awanki）」という呪具を主人公がアエオイナカムイの妹から渡されるという場面がある。これを用いなければ雷の神を倒すことはできない上、彼女が主人公の味方であることが明らかになるという意味でも、ストーリーの上では欠かすことのできない場面である。この「金の扇」は、S29年版では戦いの最中に周囲の目を盗んで渡されるが、S40年版では雷の神との戦いが始まる前に渡されるという順序の入れ替えが見られる。

戦闘場面以外では、地下の国のトゥムンチエカシから借りた鎧を返す際に、S29年版では、「兄から自分の鎧を渡される→受け取る→借りている鎧を脱ぐ→自分の鎧を着る→借りた鎧を送り返す」という順序で語られている。同じ場面をS40年版では、「借りている鎧を脱ぐ→鎧を送り返す→兄から自分の鎧を渡される→自分の鎧を着る」という順序となっており、もともと自分のものであった鎧を兄から返される順序が前後している。

このように2つのテキストを並べてみると、事物や状況の描写や鎧を返す順序のように、ストーリーには直接影響を及ぼさないように思える細かな交替ばかりではなく、「金の扇」を手渡すタイミングのようなストーリー上の重要な行為にいたるまで、語る順序の交替がしばしば見られることがわかる。したがって、アイヌ英雄叙事詩においては状況・様子の描写や行為などを物語る順序は、比較的自由に交替すると言えるだろう。

なお、英雄叙事詩ではないが、神謡の語りについて「ストーリーは固定した順序で展開していくものとして記憶されているのではなく、出来事の事実関係という形で記憶されている」（中川、2001a：P75）という同様の指摘がなされており、出来事の事実関係が同じであれば、その出現順についての自由度が高いという特徴は、アイヌ文学（あるいは口承文学）の語りに共通する可能性も考えられるだろう。

７．まとめ

２種類の「ニタイパカイェ Nitaypakaye」のテキストの、主にプロットと登場人物の語られ方に焦点をあてて、両テキストにおける異同を見てきた。

物語の終盤に至るとプロットの違いも見られるが、それ以外では基本的な話の構成や登場人物の役割や行為といった、ストーリーに関わるような部分では両テキストの間に差異はほとんど見られなかった。

一方で、結末の語り方や主人公の出自をめぐっての語り方、行為の理由や行為を語る順序に関しては、さまざまな差異がみられた。

大まかな傾向として、ストーリーの展開に直接関係してくる要素については両テキストで共通しているが、ストーリーに直接影響を及ぼさない限りにおいてはその語り方や要素に違いがみられるといえる。

フォースター（1994）は、「ストーリーを、『時間の進行に従って事件や出来事を語ったもの』と定義」し、「プロットは、それらの事件や出来事の因果関係に重点が置かれ」るものだ（P129）として、時間の進行にしたがって出来事を並べたストーリーと、それを再編成したプロットとを区別している。その上で、「ストーリーなら、『それから？』と聞きます。プロットなら、『なぜ？』と聞きます。これがストーリーとプロットの根本的な違いです」（P129-130）として、プロットでは「時間の進行」よりも「因果関係が影を落とす」と説明している。

こうしたストーリーとプロットとの区別を踏まえると、アイヌ英雄叙事詩においては、テキストとして顕在化しているプロットではなく、潜在的なストーリーを重視して物語が記憶されていると言えるだろう。そして、重視されるのはストーリーが同一であることなので、そこに関わる要素はきわめて固定的である。一方で、実際にどのような順序で語るかというプロットに関わる要素に関しては、多少の入れ替えや相違が見られても、同一の物語（ストーリー）として成立することに何ら影響を及ぼさないと考えられる。

だからといって、実際の語りにおいては必ずしもストーリーをそのまま再現することだけを目的としているのではないらしい様子も垣間見えた。S29年版の前半においては「なぜ主人公は育ての爺に育てられているのか」という「なぜ？」や因果関係をどのように解き明かすのかについて工夫がうかがえた。こうした因果関係は、むしろプロットの構成から生み出される特徴である。したがって、単にストーリーを再現するだけではなく、どのようにプロットを組み立てるのか、あるいはそれによってどのように因果関係を説明するのかといった相違も、「ニタイパカイェ」のそれぞれのバージョンにおける差異となっていると言えるだろう。

使用テキスト

門別町郷土史研究会（編）、1969『アイヌの叙事詩』［鍋沢元蔵（筆録）、扇谷昌康（訳注）］
国立民族学博物館所蔵　鍋沢元蔵筆録ノート「ユカル　傳　昭和弐拾九年二月」

参考文献目録

遠藤志保，2010「鍋沢元蔵筆録のアイヌ英雄叙事詩における虚辞ならびに韻律調整方法」『千葉大学人文社会科学研究　第21号』千葉大学人文社会科学研究科．
萱野　茂，1998『萱野茂のアイヌ神話集成　第９巻　ユカｩ編Ⅲ』ビクターエンタテインメント．
金成まつ（筆録），金田一京助（訳注），1964『アイヌ叙事詩　ユーカラ集Ⅳ』三省堂．
金成マツ（著），高橋靖以・切替英雄・蓮池悦子（翻訳），2009『平成20年度　アイヌ民族文化財調査報告書　金の草履の六人の兄』北海道教育委員会．
久保寺逸彦，1992『アイヌ語・日本語辞典稿』北海道教育委員会．
小松和彦（監修），常光徹・山田奨治・飯倉義之（編），2013『日本怪異妖怪大事典』東京堂出版．
坂田美奈子，2011『アイヌ口承文学の認識論《エピステモロジー》― 歴史の方法としてのアイヌ散文説話』御茶の水書房．
田村すず子，1996『アイヌ語沙流方言辞典』草風館．
中川　裕，1995『アイヌ語千歳方言辞典』草風館．
中川　裕，2001a「口承文芸のメカニズム　アイヌの神謡を素材に」藤井貞和・エリス俊子（編）『シリーズ言語態２　創発的言語態』東京大学出版会．
中川　裕，2001b「トゥムンチ　ペンチャイ，オコッコ　ペンチャイ ― アイヌ語千歳方言叙事詩テキスト ― 」三浦佑之（編）『叙事詩の学際的研究』平成９年度～平成12年度　科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書．
蓮池悦子，1997「伝承と伝承者 ―― 金成マツ」『岩波講座　日本文学史　第17巻』岩波書店．
E.M. フォースター（著），中野康司（訳），1994『E.M. フォースター著作集８　小説の諸相』みすず書房．

参考URL

国立民族学博物館HP「研究プロジェクト」
「アイヌ語を中心とする国立民族学博物館所蔵北方諸言語音声資料の分析」
http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/iurp/07jr101
北海道立アイヌ民族文化研究センターHP「ほっかいどうアイヌ語アーカイブ」
「アイヌ口承文芸：平賀さだ氏　2-1」（公開資料番号 YC800020-02）
http://ainugo.ainu-center.pref.hokkaido.jp/generalMokuji.aspx?SeiriNum=20051102
「アイヌ口承文芸：平賀さだ氏　2-2」（公開資料番号 YC800021）
http://ainugo.ainu-center.pref.hokkaido.jp/generalMokuji.aspx?SeiriNum=20051103